

第4節 飛留喜田原地区の遺構

飛留喜田原地区は、中川集落から南西方に位置し、億首川下流域の左岸に所在する。当地区は億首川が大きく蛇行し河川流路に変化をあたえる場所になる。

予備調査では、丘陵の縁辺部から斜面地で実施した。確認された遺構は、古竈47基（岩陰竈4基・岩陰石積竈4基・掘込竈10基・岩陰掘込竈1基・仮竈2基・不明古竈26基）、石積み1基、道跡8箇所であり、合計48基と8箇所を数える。以下、飛留喜田原地区の遺構分布について調査地区を北方から南方に①～⑥の小地区に分けて詳解する（図4.19・図4.20）。

①地区 飛留喜田原地区の北端は、国頭磯層が分布する丘陵斜面に位置する。標高16～18m地点から、H01～H04号竈、H48・H49号遺構を確認。古竈の分類は、H02・H03号竈（掘込竈）、H01・H04号竈（仮竈）である。また、H01号竈に付随するH49号遺構（道跡）とH48号遺構（石積み）を確認した（図4.21）。

②地区 飛留喜田原地区の中央部から北側は、国頭磯層が分布する丘陵斜面の谷地に位置する。標高15～20m地点から、H05～H23号竈、H50～H53号遺構を確認。古竈の分類は、H07・H08・H12号竈（掘込竈）、H09号竈（岩陰石積竈）、H10号竈（岩陰掘込竈）、H19号竈（岩陰竈）、H05・H06・H11・H13～H18・H20～H23号竈（不明竈）である。また、H50～H53号遺構（道跡）は丘陵斜面に設けられていた（図4.22）。

③地区 飛留喜田原地区の中央部は、嘉陽層が分布する丘陵斜面に位置する。標高7～22m地点から、H24～H33号竈、H54・H55号遺構を確認。古竈の分類は、H30号竈（岩陰竈）、H25・H27号竈（掘込竈）、H28・H29号竈（岩陰石積竈）、H24・H26・H31～H33号竈（不明竈）である。また、H54・H55号遺構（道跡）は、丘陵斜面の地形に沿って設けられていた（図4.23）。

④地区 飛留喜田原地区の中央部から南側は、嘉陽層が分布する丘陵斜面の崖地に位置する。標高7～9m地点から、H34～H39号竈（古竈）を確認。古竈の分類は、H34号竈（岩陰竈）、H36・H38号竈（掘込竈）、H35・H37・H39号竈（不明竈）である。その他、遺構は確認できていない。

⑤地区 飛留喜田原地区の南端は、細長く舌状に伸



図4.19. 飛留喜田原地区 遺構範囲図



写真4.29. 飛留喜田原地区遠景（南西より）

びた丘陵、地質は嘉陽層が分布する位置にある。標高4～6m地点からは、H40～H45号竈を確認。古竈と判断した遺構は、H44号竈（岩陰竈）、H40～H43・H45号竈（不明竈）である。他、土砂等による埋没や道路整備の際に破壊されたとみられる遺構も確認できた。

⑥地区 飛留喜田原地区の南東方は、嘉陽層が分布する丘陵の狭まった谷地に位置する。標高12m地点からは、H46号竈とH47号竈を確認。古竈の分類は、H46号竈（岩陰石積竈）とH47号竈（掘込竈）である。他、頭呂地原との字境付近にH56号遺構（道跡）を確認した。

以下、飛留喜田原地区で記録したH01号竈・H02号竈・H03号竈・H08号竈・H12号竈・H19号竈・H27号竈・H28号竈・H35号竈について報告する。

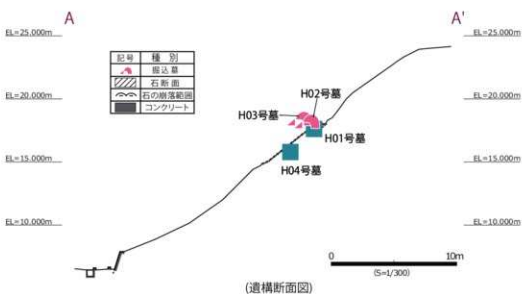
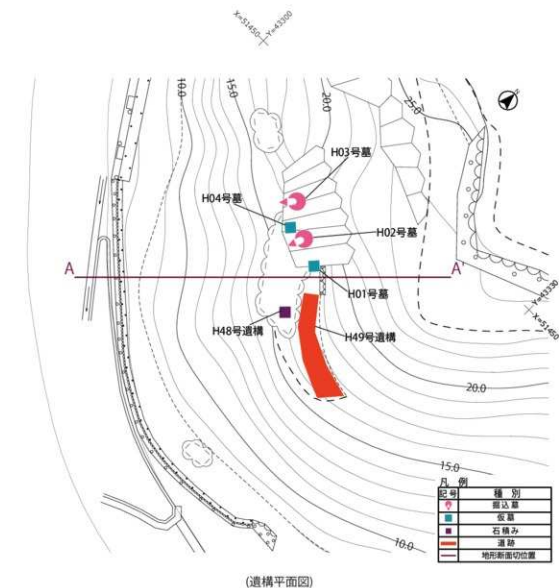
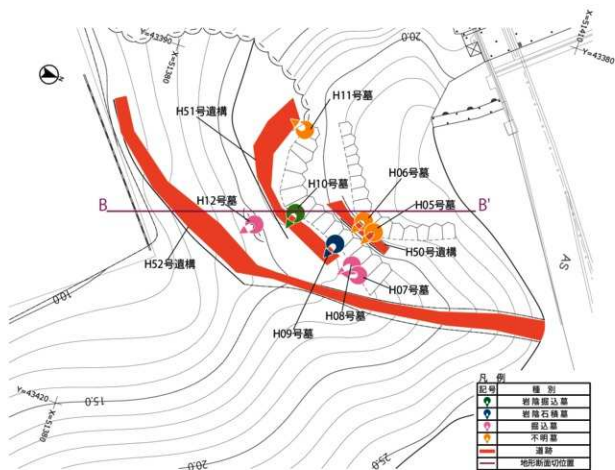
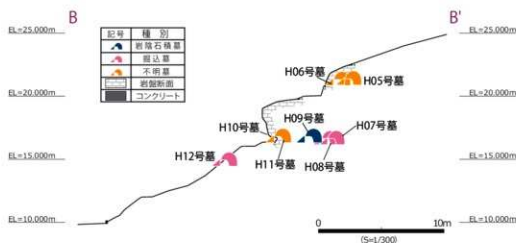


図4.21. 飛留喜田原地区 (①地区) 遺構平面図・断面図及び垂直見透遺構分布図 (1)

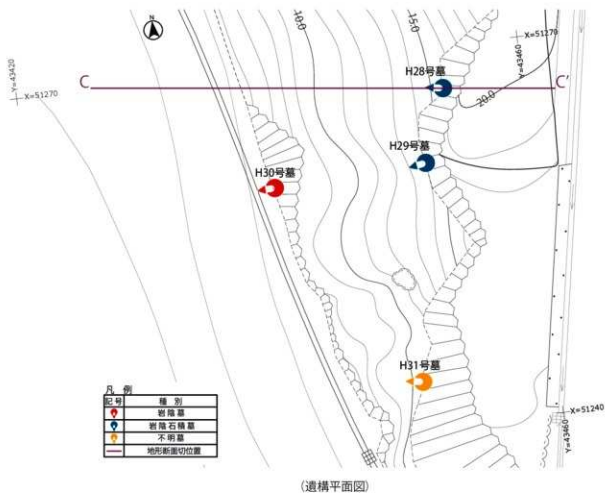


(遺構平面図)

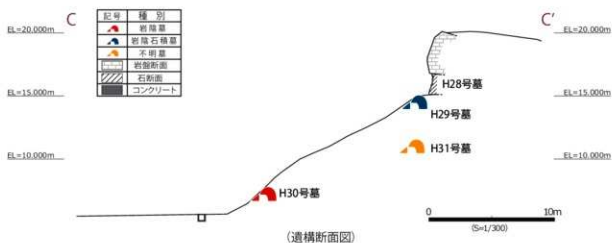


(遺構断面図)

図4.2.2. 飛留喜田原地区(②地区) 遺構平面図・断面図及び垂直見透遺構分布図(2)



(遺構平面図)



(遺構断面図)

図4.23. 飛留喜田原地区 (③地区) 遺構平面図・断面図及び垂直見透遺構分布図 (3)

H01号墓

H01号墓は、丘陵台地の斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約17m）に位置し、億首川を見下ろす場所に立地する。

当遺構は、石灰岩の切石と礫石を箱状に組み合わせて築造した古墓であった。墓口には板状に加工した石灰岩の蓋石を使用して墓室を閉塞している。墓は全体的に造りが良いとはいえず、石積みの隙間や墓口と蓋石の間から墓室内部をみる事ができた。墓口の前には石灰岩の香炉やサンミデーとみられる

方形の石灰岩が置かれていた。墓前のわずかな平坦地には墓庭が形成され、墓庭に接する斜面には、スディガチ（袖垣）のように礫石が積まれていた。

墓本体は簡易的な造りであったため調査では仮墓として記録した。また、当遺構は町誌や区誌、民話にも登場する「ギミンノヘイカ（1609年、薩摩藩による琉球侵攻の際に活躍したといわれる人物）」の墓として伝えられている古墓であり、墓室内には蔵骨器1基が安置されていた。

表4.34. H01号墓 遺構観察表

古墓の分類	仮墓（重墓）	古墓の位置（グリッド）	O27
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	南東
規模	(墓口) 幅0.40m/高さ0.60m (墓室) 幅0.60m/高さ0.50m/奥行0.80m (墓庭) 幅1.20m/長さ1.50m		
遺物	(墓室内) 外反襲形甕子 (墓室外) 香炉		



写真4.30. H01号墓



070. H01号墓 近景
071. 石積確認状況（墓庭）

072. 蔵骨器確認状況（墓室内）

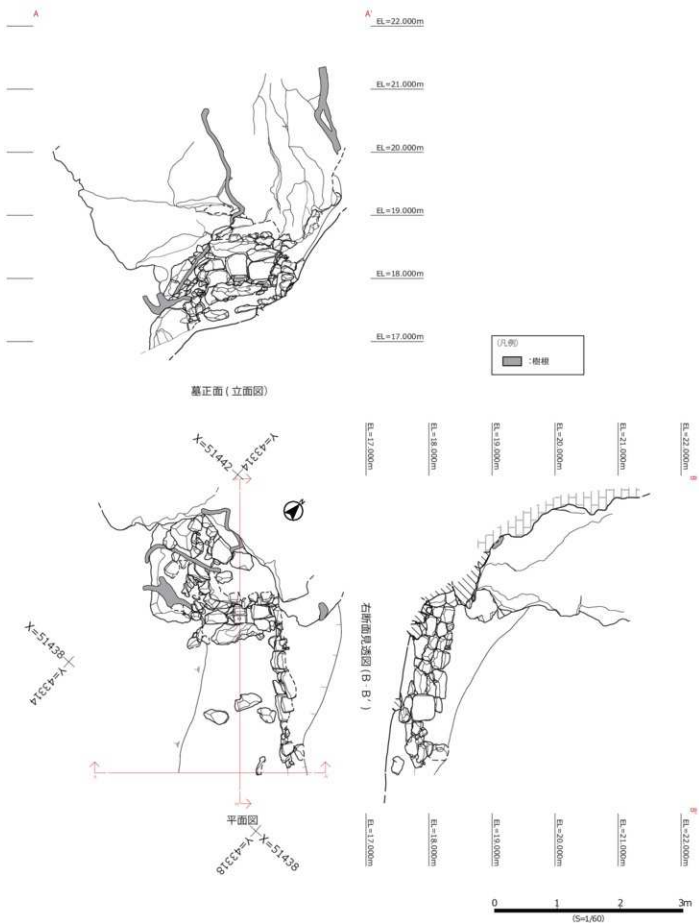


图4.24. H01号墓 (正面・平面・断面图各种)

H02号墓

H02号墓は、丘陵台地の斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約18m）に位置し、億首川を見下ろす場所に立地する。

当遺構は、直立した石灰岩に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。墓の右側壁（開口部）には墓室を閉塞していたとみられる石積みが残る程度で大半は崩れ落ちていた。また、墓が構築された場所は地層の不整合面で脆く、墓室内では崩れた箇所もみられた。

当墓は地表面から約1.8mと人目線から高い場所

に築造されており、遺構の観察から壁龕墓であった可能性も示唆される。また、墓が立地する斜面下にはコンクリートブロックや自然石で簡易的に構築した仮墓（H04号墓）があり、墓室内には有頸底付甕形の厨子甕1基が確認されている。両墓の観察から本墓と仮墓の相関的な関係がみられた。

悉皆分布調査では、当遺構から西側には同じ掘込内でH03号墓が隣接し、周辺ではH01・H03・H04号墓遺構が確認されている。

表4.35. H02号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	O27
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	南
規模	(墓口) 幅1.30m/高さ0.80m (墓室) 幅0.90m/高さ0.70m/奥行0.60m (墓庭) 幅—/長さ—		
遺物	(墓室内) —	(墓室外) 有頸底付き甕形厨子（H04号墓内）	

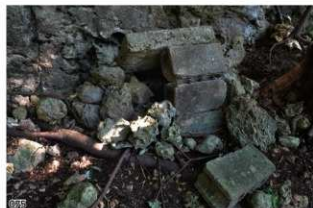


写真4.31. H02号墓

073. H02号墓 遠景

075. H04号墓 近景

074. H02号墓 近景

076. H04号墓 甕形厨子確認状況（墓室内）

H03号墓

H03号墓は、丘陵台地の斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約18m）に位置し、億首川を見下ろす場所に立地する。

当遺構は、直立した石灰岩に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。墓の開口部や墓室では、石積み跡や礎石などの散見は確認できなかったため墓室を閉塞

しない構造であったと考えられる。墓前では厨子甕片を3点確認した。

当墓が構築された場所は地層の不整合面で脆く、墓室内では崩れた箇所もみられた。また、墓は地表面から約2mと人目線から高い場所に築造されており、遺構の観察から壁龕墓であった可能性も示唆される。

表4.36. H03号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	O27
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	南西
規模	(墓口) 幅2.40m/高さ0.90m (墓室) 幅2.20m/高さ1.00m/奥行0.70m (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) ー (墓室外) 埴形厨子片		



写真4.32. H03号墓

077. H03号墓 遠景

079. H03号墓 近景（南西から）

078. H03号墓 近景（北西から）

080. H03号墓 墓室内

H08号墓

H08号墓は、丘陵台地の急斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約16m）に位置し、周囲からは見えにくい奥まった場所に立地する。

当遺構は、石灰岩に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。墓の前面部から右側壁には石積みが残り、石と石の隙間にはモルタルの跡が確認できた。墓室内には閉

塞に使用したとみられる石積みが崩れ落ちた状態で確認できた。また、墓室内には墓を移設した際に破棄されたとみられる厨子甕の破片があった。墓前には半坪ほどの墓庭が設けられており、その場所を囲むように礎石の並びが確認できた。

悉皆分布調査では、当遺構から東側には隣接してH09・H10号墓が確認されている。

表4.37. H08号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	M25
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	南東
規模	(墓口) 幅1.80m/高さ0.60m (墓室) 幅1.10m/高さ0.60m/奥行1.30m (墓庭) 幅2.90m/長さ2.50m		
遺物	(墓室内) 甕形厨子片 (墓室外) —		



写真4.33. H08号

081. H08号墓 遠景 082. H08号墓 近景
083. 石積み確認状況（墓庭） 084. 遺物確認状況（墓室内）

H12号墓

H12号墓は、丘陵台地の急斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約14m）に位置し、周囲からは見えにくい奥まった場所に立地する。

当遺構は、石灰岩に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。掘込みの開口部には、墓室を閉塞した石灰岩の石積みが残し、石と石の間にはモルタルの跡が確認できた。墓室は方形に形が整えられており、他の墓

遺構と比較して丁寧な造りがみられた。また、墓は地表面から少し高い場所に造られており、墓前から墓口までは、礎石と盛土で階段状（3段）に整備され、最上には扁平な石がサンミデーのように設置されていた。

墓前には、遺骨を移す際に廃棄されたとみられる厨子甕の破片が確認できたが、当墓との関係性については不明である。

表4.38. H12号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	M25
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	南東
規模	(墓口) 幅0.90m/高さ0.60m (墓室) 幅1.50m/高さ0.50m/奥行0.80m (墓底) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) — (墓室外) 外反甕形厨子破片		



写真4.34. H12号墓

085. H12号墓 遠景（南から）
087. H12号墓 近景

086. H12号墓 遠景（北東から）
088. 遺物散布状況（墓南方）

H19号墓

H19号墓は、丘陵台地の急斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約14m）に位置し、周囲からは見えにくい奥まった場所に立地する。

当遺構は、石灰岩の斜面岩陰を利用した岩陰墓（古墓）とし記録した。現状、墓に関連される痕跡や遺物などは確認できていないが、岩盤の前面一部に削り出した跡がみられた。

他の墓遺構と比較して、形状や規模など墓として利用は可能であると判断した。



写真4.35. H19号墓

表4.39. H19号墓 遺構観察表

古墓の分類	岩陰墓	古墓の位置（グリッド）	L24
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	北西
規模	(墓口) 幅2.50m/高さ1.60m (墓室) 幅2.20m/高さ1.50m/奥行1.10m (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) ー (墓室外) ー		

H27号墓

H27号墓は、丘陵台地の斜面中腹、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約20m）に位置し、億首川を見下ろすことができる場所に立地する。

当遺構は、他の地域と比べて脆い石灰岩の崖面に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態で確認された。墓室内を閉塞する石積みなどの痕跡は確認できていない。また、墓室は方形に形が整えられており、他の墓遺構と比較して丁寧な造りがみられた。

当墓から遺骨や蔵骨器などの遺物は確認できていない。築造年代観についても情報が少ないため不明である。



写真4.36. H27号墓

表4.40. H27号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	L23
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	南西
規模	(墓口) 幅3.00m/高さ1.20m (墓室) 幅1.60m/高さ1.10m/奥行0.90m (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) ー (墓室外) ー		

H28号墓

H28号墓は、丘陵台地の縁辺部、露頭する琉球石灰岩の崖地（標高約15m）に位置し、億首川を見下ろす場所に立地する。

当遺構は、石灰岩の岩陰を利用して、さらに横穴を掘り込んで墓室を構築した岩陰掘込墓（古墓）である。墓の前面部は岩盤の開口部に沿って石灰岩の礫石が積み上げられていた。また、前面の中央部には蓋石とは異なる一枚岩（巨礫）が設置されていた。他の墓遺構ではみられない特徴があった。石積みの

隙間から墓室内には陶製家形厨子（コバルト掛け）1基が確認できた。墓の規模から他蔵骨器が安置されている可能性も示唆される。墓前にはコンクリートで造られた香炉が置かれていた。

確認された蔵骨器（19世紀以降の焼物）から当遺構は近世墓として分類した。墓の状態は比較的良好であり、香炉も新しいものではあるが、現在も使用されているかは不明である。

表4.41. H28号墓 遺構観察表

古墓の分類	岩陰石積墓	古墓の位置（グリッド）	L22
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	西
規模	(墓口) 幅2.80m/高さ1.60m (墓室) 幅一/高さ一/奥行一 (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) 陶製家形厨子 (墓室外) 香炉		



写真4.37. H28号墓

091. H28号墓 発見時

093. 香炉確認状況（墓前）

092. H28号墓 遺構

094. 蔵骨器確認状況（墓室内）

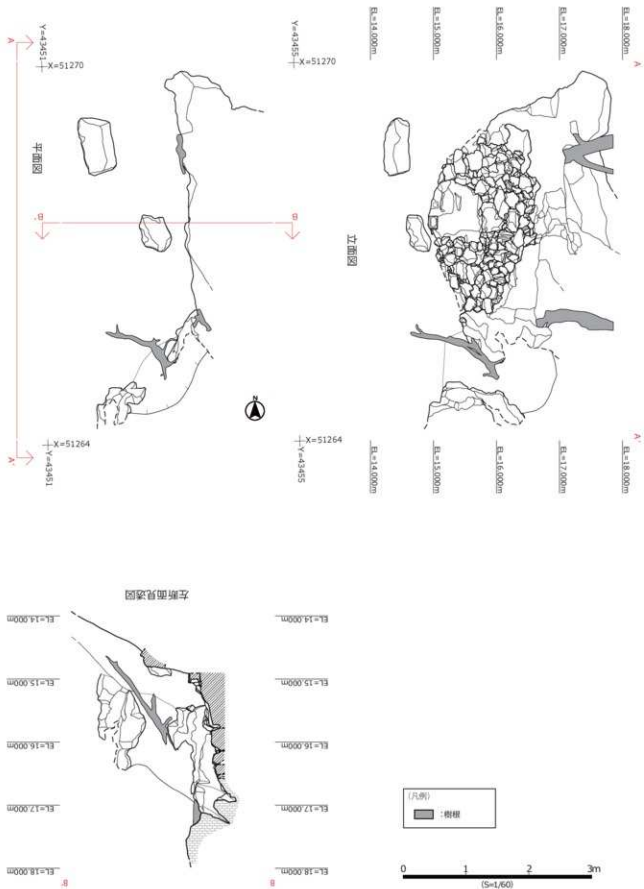


図4.25. H28号墓 (正面・平面・断面図各種)

H38号墓

H38号墓は、丘陵台地の縁辺部、露頭した琉球石灰岩の崖地（標高約8m）に位置し、億首川を見下ろす場所に立地する。

当遺構は、直立した石灰岩に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。墓室は方形に形が整えられていた。石灰岩の開口部に墓室を閉塞する石積みは確認できていない。墓前には比較的広い平坦地があり礎石が

散見された。墓室内部や墓前には大量の土砂が堆積しているため墓全体の規模については情報が少なく確認できていない。また、当墓から遺骨や蔵骨器などの遺物も確認できていない。

当墓から北側には、同じ岩盤の岩陰からH37号墓遺構や南側にH39号墓が確認されているが土砂の堆積で詳細な記録はできていない。周辺一帯で確認された遺構も同じ状態であった。

表4.42. H38号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	J20
立地	露頭した琉球石灰岩の崖地	墓口の向き	西
規模	(墓口) 幅1.20m/高さ0.60m (墓室) 幅1.10m/高さ0.80m/奥行0.80m (墓底) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) — (墓室外) —		



写真4.38. H38号墓

095. H38号墓 発見時状況
097. H38号墓 近景

096. H38号墓 遠景
098. H37号墓（左）・H38号墓（右） 遠景

表4.43. 飛騨喜田原地区 遺構一覧表(1)

遺構番号 (発掘等)	グリッド	遺構種類	判断基準	土層分類	遺構座標 概略-m	基面 方向	遺構寸法 概略-m	附帯要素	掲載頁
H01号基 (18001)	O27	古基	◎	仮置	X=51440.305 Y=43313.560 標高=17.610	南東	(開口)幅0.40m/高さ0.60m /奥行0.20m (壁面)幅0.60m/高さ0.50m /奥行0.80m (基礎)幅1.20m/高さ1.50m	石灰岩石壁の残みを利用した古基。基壇正面に土を積み上げて蓋し、墓室を構築。墓口は墓石で閉塞。墓室内で二重1層を築造。香炉とサンミデー、墓室を有する。北近らしき石仏を有する。全図で北にギミンノヘイカの墓と記載。	P77
H02号基 (18002)	O27	古基	◎	仮置	X=51441.214 Y=43313.446 標高=17.710	南	(開口)幅1.30m/高さ0.80m (壁面)幅0.90m/高さ0.70m /奥行0.60m	石灰岩を掘り込んだ仮置基。基壇に掘り込まれる。墓口を埋蓋していた可能性有り。石仏みが判別の一で残存。	P79
H03号基 (18003)	O27	古基	◎	仮置	X=51442.897 Y=43310.921 標高=17.930	南西	(開口)幅2.40m/高さ0.90m (壁面)幅2.20m/高さ1.00m /奥行0.70m	石灰岩を掘り込んだ仮置基。基壇に掘り込まれる。墓口は埋蓋されているがH02号基と違い、使役や墓口にて土を積み蓋す。	P80
H04号基 (18004)	O27	古基	◎	仮置	X=51441.132 Y=43312.049 標高=15.780	南東	(壁面)幅1.10m/高さ0.80m	墓口面はコンクリートブロック、使役は片断石を積み上げていた。墓室内に母子壺を埋蔵。H02号基の敷居の可能性あり。	
H05号基 (18013)	M25	古基	△	不明	X=51399.498 Y=43399.060 標高=20.950	北	(開口)幅1.10m/高さ0.50m	石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H06号基 (18012)	M25	古基	△	不明	X=51398.474 Y=43398.477 標高=20.900	北	(開口)幅0.90m/高さ0.30m	石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H07号基 (18009)	M25	古基	◎	仮置	X=51399.410 Y=43402.658 標高=16.211	南	(開口)幅0.90m/高さ0.30m (壁面)幅0.80m/高さ0.40m /奥行0.50m (基礎)幅2.90m/高さ2.50m	石灰岩石壁を掘り込んだ仮置基。H08号基の墓口と一帯が重なり、墓室も共有。墓室内で母子壺片を埋蔵。H08号基の仮置の可能性あり。	
H08号基 (18008)	M25	古基	◎	仮置	X=51398.712 Y=43402.090 標高=16.210	南東	(開口)幅1.80m/高さ0.60m (壁面)幅1.10m/高さ0.60m /奥行1.30m (基礎)幅2.90m/高さ2.50m	ほぼ直立する石灰岩石壁の残みを利用した古基。H07号基の墓口と一帯が重なり、墓室も共有。墓室内にはほぼ水平な石を埋蔵し詳細不明。	P81
H09号基 (18075)	M25	古基	◎	判断 石仏基	X=51396.915 Y=43400.901 標高=16.366	南東	(開口)幅1.40m/高さ1.0m	ほぼ直立する石灰岩石壁の残みを利用した古基。墓口は土を積み上げ、北側にモルタルで埋め、階段から内側の空間を確保。	
H10号基 (18007)	M25	古基	◎	古基 仮置	X=51393.071 Y=43399.629 標高=16.360	北	(開口)幅1.40m/高さ0.60m (壁面)幅1.10m/高さ0.40m /奥行0.50m	石灰岩の残みを利用した古基。墓室内、墓口面は埋蓋。墓口は開口し、墓口蓋は石やモルタル片が散乱。	
H11号基 (18010)	M25	古基	△	不明	X=51391.665 Y=43393.108 標高=16.380	南	(開口)幅1.50m/高さ0.90m	石灰岩の残みを利用した古基の可能性あり。墓口とと思われる残みを確認。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H12号基 (18006)	M25	古基	◎	仮置	X=51390.069 Y=43401.637 標高=14.500	南東	(開口)幅0.90m/高さ0.60m /奥行0.30m (壁面)幅1.50m/高さ0.50m /奥行0.80m	石灰岩を掘り込んだ仮置基。墓室内は1m厚に掘り込まれ、床面は瓦片を積み。墓口蓋は3段の瓦版状となり、幾層にサンミデーの可能性がある。ほぼ水平な石を埋蔵。墓口面は埋蓋に覆われる。	P82
H13号基 (18076)	L25	古基	△	不明	X=51305.917 Y=43447.212 標高=18.128	北	(開口)幅1.60m/高さ0.40m	石灰岩の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H14号基 (18019)	L25	古基	△	不明	X=51363.002 Y=43442.101 標高=17.000	北	(開口)幅1.00m/高さ0.60m	石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は石灰岩が露出し詳細不明。	
H15号基 (18020)	L24	古基	△	不明	X=51358.910 Y=43433.176 標高=17.858	北	(開口)幅1.30m/高さ0.70m	石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H16号基 (18021)	L24	古基	△	不明	X=51358.613 Y=43431.575 標高=18.000	北	(開口)幅1.90m/高さ0.60m	石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H17号基 (18022)	L24	古基	△	不明	X=51356.513 Y=43428.319 標高=18.480	北	(開口)幅0.60m/高さ0.30m	石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	
H18号基 (18023)	L25	古基	△	不明	X=51360.708 Y=43428.457 標高=15.260	北	(開口)幅1.60m/高さ0.70m	ほぼ直立した石灰岩石壁の残みを利用した古基の可能性あり。お墓内は埋蓋し詳細不明。	

*1 古基判断基準凡例 ◎：人為的痕跡を確認した古基 ○：人為的痕跡を確認できなかった古基 △：古基が埋蓋された埋設している可能性がある斜面地の遺構

*2 備考欄で使用する「右」「左」は真正面に向かって合った方向である。

表4.44. 飛留喜田原地区 遺構一覽表 (2)

選構 番号 (区画)	グ リ ド	通 路 種 別	非 対 称 性	土 質 分 類	基礎地盤 深さ[m]	蓋工 方 法	選構寸法 標準[m]	新 興 設 備	地 盤 員
H19号区 (18024)	L24	土留	○	岩盤層	X=51359.429 Y=43426.447 標高=14.410	北	(蓋) H92.50m/高さ1.60m (蓋土)H22.20m/高さ1.50m /奥行1.10m	石灰岩地盤の隆みを利用した岩盤型の可成りあり。岩盤内には空洞を有す。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	P83
H20号区 (18025)	L24	土留	△	不図	X=51357.056 Y=4324.631 標高=15.400	北	(隆み)H2.120m/高さ0.90m	ほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。	
H21号区 (18026)	L24	土留	△	不図	X=51356.389 Y=4322.086 標高=13.850	北	(隆み)H2.100m/高さ1.10m	石灰岩の隆みを利用した土留の可成りあり。H20号区と同様に隆。岩盤内に平ら面を有す。岩盤厚はH53号蓋前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H22号区 (18027)	M24	土留	△	不図	X=51350.658 Y=43116.396 標高=16.400	北	(隆み)H2.120m/高さ0.50m	石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。	
H23号区 (18091)	M24	土留	△	不図	X=51341.349 Y=43405.323 標高=11.194	南	(隆み)H2.110m/高さ0.30m	石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。	
H24号区 (18090)	L23	土留	△	不図	X=51316.297 Y=43433.592 標高=13.443	南	(隆み)H2.160m/高さ0.20m	石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。岩盤内や前直に崩落したと考えられる石が隆。隆。	
H25号区 (18029)	L23	土留	△	砂状土	X=51290.106 Y=43446.532 標高=15.760	北	(蓋) H93.00m/高さ1.80m (蓋土)H22.40m/高さ1.30m /奥行0.80m	石灰岩地盤の隆みを盛り込んだ砂状土。蓋土は岩盤の隆みを盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H26号区 (18030)	L23	土留	△	不図	X=51287.947 Y=43448.481 標高=17.500	北	(隆み)H2.220m/高さ1.40m	ほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。蓋土は岩盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H27号区 (18031)	L23	土留	△	砂状土	X=51286.005 Y=43533.236 標高=20.400	南	(蓋) H93.00m/高さ1.20m (蓋土)H21.60m/高さ1.10m /奥行0.90m	石灰岩地盤の隆みを盛り込んだ砂状土。蓋土は石灰岩地盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	P83
H28号区 (18034)	L22	土留	○	岩盤層	X=51266.692 Y=43533.639 標高=15.170	西	(蓋) H92.80m/高さ1.60m	石灰岩地盤の隆みを利用した岩盤型土留。蓋土は石灰岩地盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	P84
H29号区 (18035)	L22	土留	○	岩盤層	X=51260.968 Y=43531.560 標高=14.000	西	(蓋) H92.90m/高さ0.80m (蓋土)H22.70m/高さ0.80m /奥行0.80m	ほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。蓋土は岩盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H30号区 (18089)	L22	土留	○	岩盤層	X=51260.462 Y=43394.421 標高=6.713	西	(隆み) H2.120m/高さ0.90m	石灰岩の隆みを利用した土留の可成りあり。蓋土内には空洞を有す。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H31号区 (18036)	L22	土留	△	不図	X=51243.772 Y=43449.224 標高=10.500	南	(隆み)H2.270m/高さ1.80m	ほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。	
H32号区 (18037)	K21	土留	△	不図	X=51207.899 Y=43483.759 標高=14.600	北	(隆み)H2.110m/高さ1.00m	ほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。蓋土は岩盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H33号区 (18096)	K21	土留	△	不図	X=51211.694 Y=43488.005 標高=21.708	南	(隆み)H2.140m/高さ0.70m	幾何学的に造られたほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。	
H34号区 (18038)	J20	土留	○	岩盤層	X=51177.721 Y=43512.417 標高=9.370	南	(蓋) H92.20m/高さ0.50m (蓋土)H22.30m/長さ0.80m	ほぼ直立した石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。蓋土は岩盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H35号区 (18039)	J20	土留	△	不図	X=51176.033 Y=43513.934 標高=9.160	北	—	石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。H34号区に準。蓋土は岩盤の隆みに依り、岩盤を盛り込んで造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H36号区 (18040)	J20	土留	△	砂状土	X=51172.808 Y=43515.788 標高=7.430	北	(蓋) H90.60m/高さ0.80m /奥行0.30m (蓋土)H22.90m/長さ2.80m	石灰岩地盤の隆みを盛り込んだ砂状土の可成りあり。蓋土内にはコンクリートを埋めて蓋土を造。蓋土は蓋土で造。蓋土厚はH53号蓋(既設)前後の蓋に附かれた可成りあり。	
H37号区 (18041)	J20	土留	△	不図	X=51161.172 Y=43522.638 標高=8.760	西	(隆み)H2.130m/高さ0.50m	石灰岩地盤の隆みを利用した土留の可成りあり。岩盤内には空洞は詳細不詳。	

※1 古墓判断基準凡例 ○：人為的痕跡を確認した古墓 ○：人為的痕跡が確認できなかった岩陰 △：古墓が崩落または埋没している可能性がある斜里地の窪み

※2 備考欄で使用する「右」「左」は真正面に向き合った方向である。

表4.45. 飛留喜田原地区 遺構一覧表(3)

遺構 番号 (調査号)	グリ ッド	遺構 種類	半断 基本	土層 分類	遺構座標 標高-m	基 方 向	遺構寸法 標高-m	説 明 説 明	相 関 表
H38号遺 (18042)	J20	土層	○	浮込土	X-S1162.296 Y=43522.849 標高=8.550	西	(壁)幅1.20m/高さ0.60m (壁)厚1.10m/長さ0.80m /奥行0.80m	石灰岩土層を掘り込んだ遺構。壁内は石灰岩を掘り込み、床は長方形を呈す。遺構は埋没し、壁面の床は土層前面で高さ差あり。	P86
H39号遺 (18077)	J19	土層	△	不明	X-S1152.313 Y=43522.525 標高=8.116	南	(壁)幅1.00m/高さ0.40m	石灰岩土層の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は埋没し詳細不明。	
H40号遺 (18045)	J19	土層	△	不明	X-S1137.078 Y=43523.155 標高=8.011	西	(壁)幅0.40m/高さ0.20m	石灰岩の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は埋没し詳細不明。壁1と見られる一部が残存。崩壊した石灰岩の壁面から空洞を確認。	
H41号遺 (18046)	J19	土層	△	不明	X-S1135.021 Y=43524.493 標高=8.871	西	(壁)幅0.60m/高さ0.50m	石灰岩の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は埋没し詳細不明。崩壊した石灰岩の壁面から空洞を確認。	
H42号遺 (18047)	J19	土層	△	不明	X-S1133.724 Y=43524.789 標高=8.691	西	(壁)幅0.80m/高さ0.40m	斜面に露出した石灰岩の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は埋没し詳細不明。崩壊した石灰岩の壁面から空洞を確認。	
H43号遺 (18055)	H17	土層	△	不明	X-S1079.126 Y=43594.307 標高=4.460	南	(壁)幅3.20m/長さ2.20m	斜面に露出した石灰岩の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は石灰岩が露出し詳細不明。壁面の可能性は高くないと推定される。	
H44号遺 (18057)	H17	土層	○	岩盤	X-S1078.470 Y=43607.281 標高=6.191	西	(壁)幅1.90m/高さ0.60m	ほぼ直立した石灰岩土層の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は平坦面を有す。壁の床は土層より一段高い。	
H45号遺 (18083)	H17	土層	△	不明	X-S1075.589 Y=43610.587 標高=4.198	南	(壁)幅0.90m/高さ0.40m	ほぼ直立した石灰岩土層の壁面を利用した土層の可能性あり。壁内は平坦面を有す。	
H46号遺 (18059)	H19	土層	○	岩盤 石灰岩	X-S1146.761 Y=43587.283 標高=12.400	南	(壁)幅3.30m/高さ1.20m (壁)厚2.40m/長さ0.90m /奥行1.30m	H20号遺のH5-11号遺。石灰岩土層の壁面を利用した土層。壁内でも多くの石が堆積。石積みにより壁1と見られる可能性あり。	
H47号遺 (18060)	H20	土層	○	浮込土	X-S1169.138 Y=43602.268 標高=12.020	南	(壁)幅0.60m/高さ0.40m (壁)厚3.00m/長さ3.50m	H20号遺のH5-10号遺。石灰岩を掘り込んだ土層。壁内はモルタルを以て壁面を整形する。壁中央部に「タナ」あり。	
H48号遺構 (18094)	O26	石灰岩	—	—	X-S1136.101 Y=43316.537 標高=15.900	—	(石灰岩)幅4.00m /高さ3.80m	斜面で露出した石灰岩。南側から北にかけて残存し、3～4段積みで構成。H49号遺構に相当する可能性あり。石灰岩は赤褐色の南側端でH49号遺構から下りる段を確認。	
H49号遺構 (18093)	O26	遺跡	—	—	X-S11436.899 Y=43318.457	—	—	南側から北側に及び、H01号遺構へ向かう遺跡。H48号遺構(石灰岩)の南側端で東西側へ向かう段を確認。遺跡は土層中央で確認。	
H50号遺構 (18018)	M25 ～26	遺跡	—	—	X-S11399.077 Y=43398.853	—	—	北側から南側に及びる遺跡。北側はH52号遺構と繋がっていた可能性。側面等により詳細不明。	
H51号遺構 (18017)	M25	遺跡	—	—	X-S11390.911 Y=43399.780	—	—	北側から南側に及びる遺跡。本遺構はH08号遺構の段を掘りH52号遺構に含む。H10号遺構の同様の道に土層壁や石、モルタル片が散見。	
H52号遺構 (18016)	M25 ～26	遺跡	—	—	X-S11387.719 Y=43403.613	—	—	南側から北側に上る遺跡。遺跡はH51号遺構の土層でH50号遺構に付随する。H12号遺構の周辺の土層にて土層壁が散見。	
H53号遺構 (18028)	L～ M24 ～25	遺跡	—	—	X-S11356.975 Y=43412.858	—	(壁)幅0.8～1.1m (壁)厚1.0～1.2m	南から北に上る遺跡。遺跡はH51号遺構の土層でH50号遺構に付随する。H12号遺構の周辺の土層にて土層壁が散見。	
H54号遺構 (18032)	L23 ～24	遺跡	—	—	X-S11310.261 Y=43428.208	—	—	南側から北側に上る遺跡。南側端は土層壁に付随していた可能性あり。遺跡の途中でH24号遺構を確認。	
H55号遺構 (18033)	L23	遺跡	—	—	X-S11296.940 Y=43436.779	—	—	南側から北側に上る遺跡。遺跡は土層壁に付随していた可能性あり。	
H56号遺構 (18073)	G～ H18 ～20	遺跡	—	—	X-S1121.202 Y=43623.002	—	—	南から北に上るH55号遺構とほぼ同様の土層。H56号遺構として使用される。周辺でH47号遺構が所在。	

第5節 頭呂地原地区の遺構

頭呂地原地区は、中川集落から南西方に位置し、億首川下流域の左岸に所在する。頭呂地原の大半が畑地であり、古くから耕作がおこなわれてきた地域である。1945年の米軍が撮影した空撮写真では、億首川に面した丘陵斜面地は緑地が広がり、現在と比較してさほど変わらない環境がみられる。

予備調査は、細長く舌状に伸びた丘陵の緑地部から斜面地で実施した。確認された遺構は、古墓22基(岩陰墓6基・岩陰石積墓2基・掘込墓2基・岩陰掘込墓1基・仮墓1基・不明墓10基)、不明遺構1基、合計23基を数える。平成20年度の埋蔵文化財予備調査^{※1}では、S09～S15・S17・S18号墓が確認されている。

以下、頭呂地原地区の遺構分布について丘陵地を西方から東方に①～④の小地区に分けて詳解する(図4.26・図4.27)。

①地区 頭呂地原地区の西端は、国頭礫層が分布する丘陵斜面に位置する。標高3～4m地点からは、S01～S08号墓を確認。古墓の分類は、S05号墓(掘込墓)、S01～S04・S06～S08号墓(不明墓)である。また、斜面地には、墓跡のような窪みもみられたが岩盤の崩落や土砂などの埋没により、遺構の分類ができなかった箇所もあった(図4.27)。

②地区 頭呂地原地区の中央から西側は、国頭礫層が分布する丘陵斜面に位置する。標高6～13m地点からは、S09～S21号墓を確認。古墓の分類は、S10・S11・S14・S15・S21号墓(岩陰墓)、S13号墓(岩陰掘込墓)、S17・S18号墓(岩陰石積墓)、S20号墓(掘込墓)、S09号墓(仮墓)、S12・S16・S19号墓(不明墓)である。地区内では、最も多くの古墓が確認できた地域になっている。

③地区 頭呂地原地区の中央から東側は、沖積層が分布する丘陵斜面に位置する。標高5m地点からは、S22号墓(岩陰墓)を確認。他、遺構は確認できていない。

④地区 頭呂地原地区の東端は、沖積層が分布する丘陵斜面に位置する。標高12m地点からは、S23号遺構(不明)を確認。S23号遺構は、尾根先端の高い場所にあり、低地部に広がる畑地(頭呂地原・福花原)を眺望することができる。

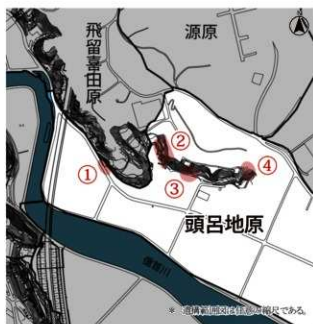


図4.26. 頭呂地原地区 遺構範囲図



写真4.39. 頭呂地原地区遠景(南西より)



写真4.40. 頭呂地原地区近景(南より)

以下、頭呂地原地区で記録したS05号墓・S20号墓・S23号遺構について報告する。

※1 金武町教育委員会編『町内埋蔵文化財予備調査報告書—億首川周辺(平成18～20年度)—』(金武町の歴史と文化 第4集) 2010年

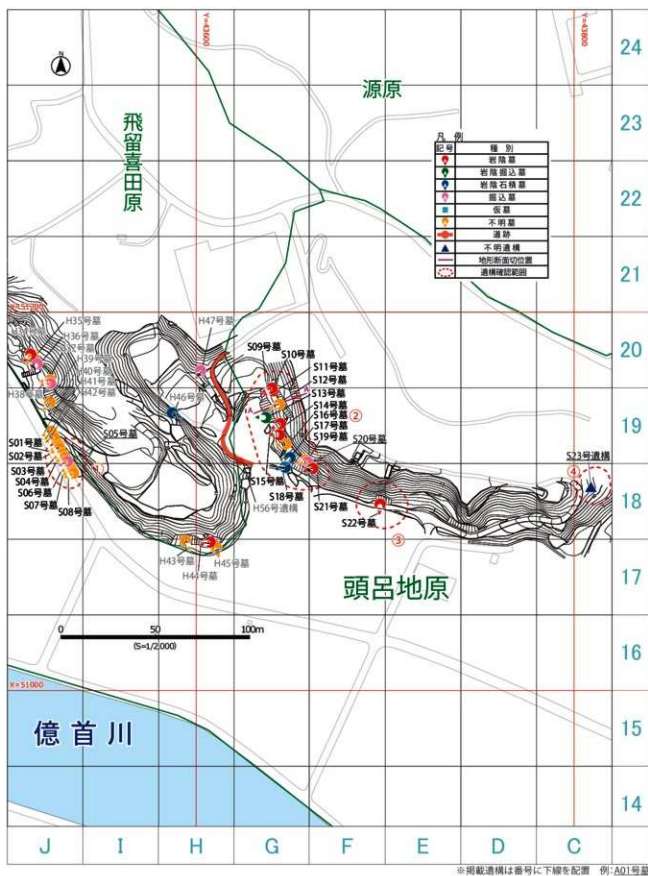


図4.27. 頭呂地原地区 遺構位置図

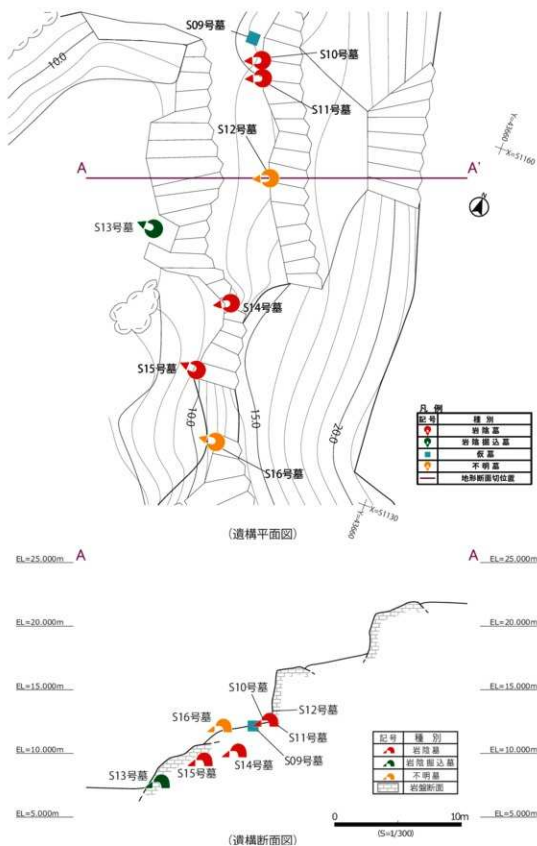


図4.28. 頭呂地原地区 (②地区) 遺構平面図・断面図及び垂直見透遺構分布図

S05号墓

S05号墓は、丘陵斜面の低地部、露頭する琉球石灰岩の窪地（標高約3m）に位置する。頭呂地原地区では比較的低い場所で確認した遺構であった。

当遺構は、石灰岩に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。岩盤の開口部や墓室内の天井部は崩壊しており、内

部の空間は原形を留めていない。従って、遺骨や蔵骨器などの遺物は確認できていない。

当墓から前方向には公道が整備されている。墓の崩壊状況から道路敷設工事の際に破壊された可能性が示唆される。また、隣接して確認できた墓遺構も同じような状況がみられた。

表4.46. S05号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	J19
立地	露頭する琉球石灰岩の窪地	墓口の向き	西
規模	(墓口) 幅0.60m/高さ0.30m (墓室) 幅0.70m/高さ0.30m/奥行0.70m (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) ー (墓室外) ー		



写真4.41. S05号墓



101. S05号墓 遠景
102. S05号墓 近景

S20号墓

S20号墓は、丘陵斜面の低地部、露頭する琉球石灰岩の窪地（標高約10m）に位置し、周囲からは見えずに奥まった場所に立地する。

当遺構は、直立した石灰岩に横穴を掘り込んで墓

室を構築した掘込墓（古墓）であり、空墓の状態を確認された。墓室は長方形に形が整えられ、床面には礫石が散見された。これらの石材を用いて墓口を閉塞していたとみられる。

表4.47. S20号墓 遺構観察表

古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	G19
立地	露頭する琉球石灰岩の窪地	墓口の向き	西
規模	(墓口) 幅1.40m/高さ0.30m (墓室) 幅1.40m/高さ0.30m/奥行0.40m (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) ー (墓室外) ー		



写真4.42. S20号墓



103. S20号墓 遠景
104. S20号墓 近景

S23号遺構

S23号遺構は、丘陵台地の縁辺部、頭呂地原地区の東端（標高約11m）に位置し、福花原に広がる耕作地一帯を見下ろす場所に立地する。

当遺構は、人為的に造られた楕円形を呈した盛土で長軸2.2m、短軸2.0m、高さ0.9mを測る。盛土の縁にあたる部分には、土が流出しないように円礫や千枚岩などの石材で囲むように設置されていた。遺構が構築された場所や構造から琉球王朝時代の測量図根点である「印部土手」の可能性が考えられた。

但し、町史や区誌にはハル石に関する記述は無く、過去、当該地周辺で印部土手やハル石の存在についても確認できていない。

本町では琉球王朝時代から現存する印部土手は屋嘉区で1箇所確認されたのみである。また、古老からの聞き取りでは、米軍基地キャンプ・ハンセン内にも印部土手の有無について記録されているが確認までには至っていない。

表4.48. S23号遺構 遺構観察表

遺構の種類	不明遺構	遺構位置 (グリッド)	C18
立地	丘陵台地の縁辺部		
規模	幅2.00m/高さ0.90m/長さ2.20m		
遺物	—		



写真4.43. S23号遺構



105. S23号遺構 近景（北東から）
106. S23号遺構 近景（北西から）

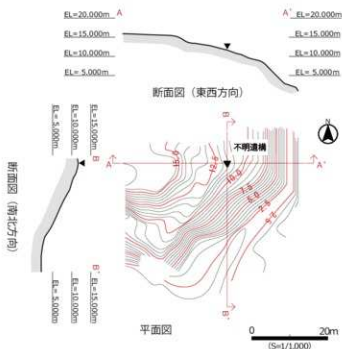


図4.29. S23号遺構 配置図 (平面図・断面図)

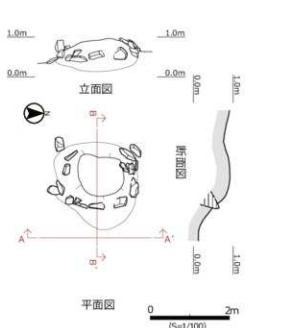


図4.30. S23号遺構 略測図 (平面図・断面図・立面図)

表4.49. 頭呂地区原地区 遺構一覧表 (1)

遺構 番号 (臨空角)	グリ ッド	遺構 種類	利用 基準	古蹟 分類	遺構座標 緯度・m	方位 方向	遺構寸法 緯度・m	総系概説	記載 頁
S01号遺 (18048)	J19	土塁	△	不詳	X=51129.391 Y=43527.537 標高=3.858	西 (厚み約)縦0.70m/高さ0.30m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S02号遺 (18049)	J19	土塁	△	不詳	X=51128.143 Y=43527.767 標高=3.655	西 (厚み約)縦0.70m/高さ0.40m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S03号遺 (18050)	J19	土塁	△	不詳	X=51125.162 Y=43529.292 標高=3.303	西 (厚み約)縦0.60m/高さ0.40m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S04号遺 (18084)	J19	土塁	△	不詳	X=51123.420 Y=43530.613 標高=3.401	西 (厚み約)縦1.40m/高さ0.40m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S05号遺 (18085)	J19	土塁	○	不詳	X=51121.190 Y=43531.939 標高=3.454	西 (厚み約)縦0.60m/高さ0.30m (高さ約)縦0.70m/高さ0.30m /厚み0.70m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	P93
S06号遺 (18086)	J18	土塁	△	不詳	X=51118.239 Y=43533.445 標高=3.246	西 (厚み約)縦1.10m/高さ0.40m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S07号遺 (18087)	J18	土塁	△	不詳	X=51116.466 Y=43534.343 標高=3.233	西 (厚み約)縦0.50m/高さ0.20m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S08号遺 (18088)	J18	土塁	△	不詳	X=51114.918 Y=43534.958 標高=3.346	西 (厚み約)縦0.50m/高さ0.40m		石灰岩の隙間を利用した土塁の可能性あり。岩隙 内は埋没し詳細不詳。崩落した石灰岩の隙間から 空室を構築。	
S09号遺 (18066)	G20	土塁	◎	不詳	X=51161.090 Y=43638.700 標高=12.160			H20年度調査中のHS-03号遺。F遺構の出土に て確認したコンクリート製の遺構。S10号遺の 前面に位置。埋没のため、全形不詳。コンクリート やブロックを用いた土塁の可能性あり。瓦片で 装飾や遺構を構築。	

*1 古蹟判断基準凡例 ○：人為的痕跡を確認した古蹟 ○：人為的痕跡を確認できなかった古蹟 △：古蹟が崩落または埋没している可能性がある斜面地の遺構

*2 備考欄で使用する「右」「左」は最正面に向き合った方向である。

表4.50. 頭呂地原地區 遺構一覽表(2)

遺構 番号 (航空写真)	グ リ ッド	遺構 種類	方位 記号	土量 分類	遺構座標 標高[m]	墓口 方向	遺構寸法 標高[m]	調査概要	推 定 墓 主
S10号墓 (18064)	G19	土層	◎	岩陰墓	X=51159.738 Y=43639.957 標高=12.140	北・東	(墓口)幅0.70m/高さ0.80m/ 奥行0.40m (墓室)幅2.40m/高さ0.80m/ 奥行1.90m	H20年度調査時のHS-01号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓。墓口側壁が残存。墓口周辺は 赤土層で土層を閉鎖。墓口直下の石の欠けは モルタルで隙間を埋める。土層は一部が崩壊。墓 口は石灰で厚塗りされていた可能性あり。	
S11号墓 (18065)	G19	土層	○	岩陰墓	X=51158.447 Y=43605.523 標高=12.120	南・東	(墓口)幅1.40m/高さ0.50m (墓室)幅1.00m/高さ0.40m/ 奥行1.2m	H20年度調査時のHS-02号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓の可能性あり。H20年度調査時 は内部を確認できなかったが、現在は埋没し内部は詳細 不明。	
S12号墓 (18067)	G19	土層	△	不明	X=51151.309 Y=43643.873 標高=12.580	南・東	幅み約1.50m/高さ0.10m	H20年度調査時のHS-04号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した土層の可能性あり。石灰岩は埋没し詳細 不明。	
S13号墓 (18068)	G19	土層	◎	岩陰 墓	X=51144.329 Y=43636.760 標高=7.300	西	(墓室)幅2.50m/高さ0.90m/ 奥行2.20m	H20年度調査時のHS-05号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓。墓口側壁は石灰で厚塗り。墓室 の一部が崩壊。墓室奥壁は石を打覆積みし、モル タルで隙間を埋める。土層の存在は埋没し細か くも深くなく確認できず。土層は一部に石灰で厚 塗り。土層は一部に石灰で厚塗り。	
S14号墓 (18069)	G19	土層	◎	岩陰墓	X=51141.038 Y=43644.503 標高=9.720	南・東	(墓口)幅2.00m/高さ1.00m (墓室)幅1.20m/高さ1.20m/ 奥行2.50m	H20年度調査時のHS-06号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓。墓室内の土層で石灰岩を埋 め、墓室より奥に空間が狭く。自然に埋没した 可能性あり。	
S15号墓 (18070)	G19	土層	◎	岩陰墓	X=51135.173 Y=43643.878 標高=9.020	南・東	(墓口)幅1.90m/高さ0.80m (墓室)幅1.90m/高さ0.50m/ 奥行1.30m	H20年度調査時のHS-07号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓。墓室奥壁の墓口部分で石灰岩 の存在を確認。土層は一部が崩壊。土層は一部が 崩壊。墓室奥壁は石灰で厚塗り。土層は一部が 崩壊。墓室奥壁は石灰で厚塗り。	
S16号墓 (18082)	G19	土層	△	不明	X=51130.439 Y=43647.316 標高=11.692	南・東	幅み約1.40m/高さ1.00m	ほぼ直立した石灰岩岩體の存在を利用した土層 の可能性あり。石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋 め、墓室より奥に空間が狭く。自然に埋没した 可能性あり。	
S17号墓 (18071)	G19	土層	◎	岩陰 墓	X=51123.149 Y=43649.593 標高=7.840	南・東	(墓口)幅1.30m/高さ0.70m (墓室)幅1.10m/高さ0.60m/ 奥行1.00m	H20年度調査時のHS-08号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓。墓室奥壁の石灰岩の一部が 残存。岩陰墓は側面よりも一段低い位置に残 存。	
S18号墓 (18072)	G18	土層	◎	岩陰 墓	X=51118.055 Y=43647.020 標高=5.640	南・東	(墓口)幅1.30m/高さ0.40m (墓室)幅1.60m/高さ0.50m/ 奥行0.90m	H20年度調査時のHS-09号墓。石灰岩岩體の存在 を利用した岩陰墓。墓室奥壁の石灰岩の一部を 石灰で厚塗り。墓室奥壁は石灰で厚塗り。	
S19号墓 (18078)	G19	土層	△	不明	X=51121.909 Y=43657.929 標高=10.570	西	幅み約1.10m/高さ0.80m	石灰岩岩體の存在を利用した土層の可能性。岩陰 内は埋没し詳細不明。	
S20号墓 (18079)	G19	土層	◎	岩陰墓	X=51120.828 Y=43658.897 標高=10.020	西	(墓口)幅1.40m/高さ0.30m (墓室)幅1.40m/高さ0.30m/ 奥行0.60m	石灰岩岩體の存在を利用した土層。墓室奥壁は石灰 で厚塗り。墓室奥壁は石灰で厚塗り。墓室奥壁は 石灰で厚塗り。墓室奥壁は石灰で厚塗り。	P93
S21号墓 (18080)	F18	土層	○	岩陰墓	X=51167.458 Y=43661.648 標高=9.073	西	(墓口)幅2.60m/高さ1.50m/ (墓室)幅2.00m/高さ1.00m/ 奥行0.30m	石灰岩岩體の存在を利用した岩陰墓の可能性あ り。土層の一部が崩壊。土層内は平坦地をすす る。	
S22号墓 (18081)	F18	土層	○	岩陰墓	X=51098.544 Y=43697.242 標高=4.790	南	幅み約1.370m/高さ1.20m	石灰岩岩體の存在を利用した岩陰墓の可能性あ り。石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋め、墓室 より奥に空間が狭く。自然に埋没した可能性あ り。	
S23号遺構 (18074)	C18	不明	-	-	X=51106.855 Y=43809.293 標高=11.718	西	幅み約2.00m/高さ0.90m/ 高さ2.20m	厚さ約0.4mの石灰岩を埋め、墓室より奥に空間 が狭く。石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋め、 墓室より奥に空間が狭く。石灰岩は厚さ約0.4m の石灰岩を埋め、墓室より奥に空間が狭く。石灰 岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋め、墓室より奥に 空間が狭く。石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋 め、墓室より奥に空間が狭く。石灰岩は厚さ約0.4 mの石灰岩を埋め、墓室より奥に空間が狭く。石 灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋め、墓室より奥 に空間が狭く。石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を 埋め、墓室より奥に空間が狭く。石灰岩は厚さ約 0.4mの石灰岩を埋め、墓室より奥に空間が狭く。 石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩を埋め、墓室より 奥に空間が狭く。石灰岩は厚さ約0.4mの石灰岩 を埋め、墓室より奥に空間が狭く。石灰岩は厚さ 約0.4mの石灰岩を	P94

※1 古基判断基準凡例 ○：人為的直路を確認した古基 ◎：人為的直路が確認できなかった岩陰 △：古基が崩落または埋没している可能性がある斜面地の痛み
※2 図例欄で使用する「右」「左」は真正面に向き合った方面である。

第6節 遺構の立地について

前節で述べたように、予備調査では露頭する琉球石灰岩の縁辺部や丘陵地一帯から、古墓、石積み、道跡、不明遺構、坪所などの遺構を確認した。なかでも古墓は確認した遺構の大半を占めており、複数の地点においては集中して認められた。また、古墓の集中する範囲では、道跡も確認されている。これら遺構の位置を明治時代末期に作成された間切図に合わせると古墓が集中する横に道（以下、「里道」とする）が整備されている様子が各所でみられた。以上を基に本節では、各遺構の位置を間切図及び垂直分布図におとし、右岸地区と左岸地区に分けて遺構の立地状況を解説する。

（1）右岸地区における遺構の立地状況

億億首川下流の右岸地区は、甘喜原・宮城原・田慶志原から成る。地質は主に琉球石灰岩で構成される段丘面が顕著に発達した地形となっている。古くから「ナグスク」「ミーチェ」の墓域が存在する場所で知られ、過去の調査と同じく露頭する琉球石灰岩の縁辺部から低地部にかけて古墓や道跡などの遺構が分布していた（図4.31）。

右岸地区墓遺構 右岸地区北側の甘喜原では、岩陰墓が多く確認されたのに対して、掘込墓は比較的少ない様相がみられる。中央の宮城原では「ナグスク」の墓域があり、琉球石灰岩の縁辺部や谷地形の奥まった場所に岩陰墓・岩陰石積墓・岩陰掘込墓・掘込墓などの墓遺構が集中している。南側の田慶志原では「ミーチェ」の墓域があり、琉球石灰岩の段丘斜面を帯状に岩陰墓と掘込墓などの遺構が多くみ

られた。以下、古墓が集中する範囲に1～4の番号を付した。

墓集中範囲1 石灰岩台地の奥まった谷地に立地した「ナグスク」の墓域。標高4～14m地点の谷地形に沿って、M39・M41・M42号墓（岩陰掘込墓）、M43号墓（岩陰石積墓）、M34・M35・M38・M40・M44・M47・M50号墓（掘込墓）、M31・M32・M33・M36・M37・M45・M46・M48・M49号墓（不明墓）、計20基の古墓が集中している。

墓集中範囲2 石灰岩台地縁辺の斜面に立地した「ナグスク」の墓域。標高17～28m地点の傾斜した地形に沿って、M76・M84・M86・M86号墓（岩陰墓）、M78・M83号墓（岩陰石積墓）、M75号墓（掘込墓）、M74・M77・M79・M80・M81・M82・M87号墓（不明墓）、計14基の古墓が集中している。

墓集中範囲3 石灰岩台地の縁辺部、急峻な谷地に立地した「ミーチェ」の墓域。標高8～11m地点の谷地形に沿って、T08・T09・T15・T16・T17・T18号墓（岩陰墓）、T03・T04・T06号墓（掘込墓）、T05・T07・T10・T11・T12・T13・T14・T19号墓（不明墓）、計16基の古墓が集中している。

墓集中範囲4 露頭する石灰岩台地の縁辺部に立地した「ミーチェ」の墓域。標高13～20m地点の縁辺から傾斜した地形に沿って、T25号墓（岩陰墓）、T27号墓（岩陰石積墓）T29・T36号墓（岩陰掘込墓）、T26・T28・T30・T31・T32・T



写真4.44. A16・M91号遺構

107. A16号遺構 遠景
108. M91号遺構 遠景

33・T34号墓（掘込墓）、T24・T35号墓（不明墓）、計13基の古墓が集中している。他の集中範囲と比して現在も使用される古墓が多くみられた。

右岸地区道跡遺構 右岸地区は、甘喜原と宮城原の小字界に国道329号が横断し、田慶志原方面には金武バイパスが開通した。その両国道の間に「ナグスク」「ミーチェ」の墓域がある。また、甘喜原の北方に位置する奥首原との小字界には奥首の交通遺跡群が分布し、過去の予備調査では宿道（国頭方東海道跡）が確認されている。これら国道や宿道は、間切図に画かれた里道と重なる様相がみられた。以下、間切図でみられる里道に①～⑦の番号を付した。

里道① 国道329号の位置と重なる里道。石灰岩台地上から低地部へ下る様子がみられる。この里道の北方で溝状に地ならしされたA16号遺構（道跡）を確認した。周辺の崖地や斜面には岩陰墓や不明墓などの遺構が点在している。

里道② 宮城原霊園内の園道と重なる里道。石灰岩台地縁辺部で道は途切れている。周辺の崖地や斜面には岩陰掘込墓、掘込墓、不明墓などの遺構を確認している。

里道③ 宮城原霊園内の園道と重なる里道。石灰岩台地上から低地部へ下る様子がみられる。この里道沿いに墓集中範囲1が所在する。調査時に低地部までの道は確認できていない。

里道④ 宮城原霊園内の園道と重なる里道。里道③と分岐する道で石灰岩台地の縁辺部で途切れている。この里道から先にM91号遺構（道跡）を確認し

た。周辺の崖地には岩陰石積墓や不明墓などの遺構が点在している。

里道⑤ 宮城原と田慶志原の小字界に位置する里道。琉球石灰岩の台地上から低地部へ下る様子がみられる。この里道沿いに墓集中範囲2・墓集中範囲3が所在する。また、墓集中範囲2ではM92・M93号遺構（道跡）を確認した。現在の道には対応していない。

里道⑥ 宮城原と田慶志原を往来する村道に重なる里道。石灰岩台地の縁辺部で画かれた里道は途切れている。この里道の先に墓集中範囲4と「ミーチェ」の墓域が所在する。

里道⑦ 宮城原と田慶志原を往来する村道に対応した里道。里道③と分岐する村道で石灰岩台地の縁辺部から斜面中腹で途切れている。周辺の崖地や斜面には岩陰墓、岩陰掘込墓、不明墓などの遺構⁹⁾が点在していた。

（2）左岸地区における遺構の立地状況

億首川下流の左岸地区は、飛留喜田原・頭呂地原から成る。地質は国頭礫層を主に琉球石灰岩が不整合に分布し丘陵台地を形成している。飛留喜田原や頭呂地原には、墓制に関連される地名などの古地名や伝承などはみられない。平成20（2008）年におこなった埋蔵文化財予備調査では、露頭する琉球石灰岩の崖地や斜面から複数の墓遺構や専用蔵骨器の破片などが確認されている（図4.32）。

左岸地区墓遺構 左岸地区北側に位置する飛留喜田原地区と南側に位置する頭呂地原地区では、岩陰墓・岩陰掘込墓・岩陰石積墓・掘込墓などの遺構



写真4.45. M92・M93号遺構

109. M92号遺構 近景
110. M93号遺構 近景

*1 金武町教育委員会編『「ミーチェ」の古墓群—億首川流域古墓群「ミーチェ」地区—』（金武町の歴史と文化 第8集）2019年。

は広い範囲で分布しているのに対して、不明墓は箇所々でまとまった様相がみられた。以下、古墓が集する範囲に5～6の番号を付した。

墓集中範囲5 丘陵台地の縁辺部、周囲から見えにくい奥まった谷地に立地する墓域。標高14～20m地点の谷地形に沿って、H10号墓（岩陰掘込墓）、H09号墓（岩陰石積墓）、H07・H08・H12号墓（掘込墓）、H05・H06・H11号墓（不明墓）、計8基の古墓が集中している。

墓集中範囲6 丘陵台地の縁辺部、細長く奥まった谷地に立地する墓域。標高11～18m地点の谷地形に沿って、H19号墓（岩陰墓）、H13・H14・H15・H16・H17・H18・H20・H21・H22・H23号墓（不明墓）、計11基の古墓が集中している。当墓域から対岸の谷斜面には墓集中範囲5が立地する。

墓集中範囲7 露頭する琉球石灰岩の丘陵斜面に立地する墓域。標高3～4m地点の斜面裾に沿って、S04号墓（掘込墓）、H40・H41・H42・S01・S02・S03・S04・S06・S07・S08号墓（不明墓）、計11基の古墓が集中している。墓域の横を公衆用道路が通る場所になっている。

墓集中範囲8 露頭する琉球石灰岩の奥まった谷地に立地する墓域。標高5～12m地点の谷地形に沿って、S10・S11・S14・S15・S21号墓（岩陰墓）、S13号墓（岩陰掘込墓）、S17・S18号墓（岩陰石積墓）、S20号墓（掘込墓）、S09号墓（仮墓）、S12・S16・S19号墓（不明墓）、計13基の古墓が集中している。

左岸地区道跡遺構 左岸地区は、飛留喜田原に国道329号が横断し、甘喜原との小字界付近に旧国道329号が通っている。さらに右岸の田慶志原方面に開通する金武バイパスが頭呂地原を横断して国道とバイパスの合流地になっている。過去の予備調査では右岸側で宿道の跡が認められており、宿道が機能していた時期から現在の国道に至るまで一帯が交通の要所となっていることが窺えた。以下、間切図でみられる里道に⑧～⑪の番号を付した。

里道⑧ 国道329号の位置と重なる里道。石灰岩台地上から低地部へ下る様子がみられる。この里道上にH52号遺構（道跡）と北方に隣接してH1号遺構（道跡）も確認している。周辺の丘陵縁辺部には墓集中範囲5が所在する。

里道⑨ 現在の地籍図等には記されていない里道。低地から丘陵斜面を上る里道として画かれており台地上では途切れている。この里道上にH53号遺構（道跡）を確認した。この道跡の脇には溝が設けられており、溝に伴う石列が4mほど残存していた。周辺の丘陵縁辺部には墓集中範囲6が所在する。

里道⑩ 金武バイパス開通以前の村道に重なる里道。低地部から丘陵斜面を上る里道であり低地の里道と台地上の里道を繋いでいる。周辺の丘陵斜面からは掘込墓・不明墓などの遺構が点在している。

里道⑪ 飛留喜田原と頭呂地原の小字界に位置する里道。この里道上に重なるようにしてH56号遺構（道跡）を確認した。周辺の丘陵縁辺部には墓集中範囲6が所在する。現在は、宅地として登記されており、道としての利用はされていない。



写真4.46. H53号遺構

111. H53号遺構溝 遠景
112. H53号遺構 石列近景



凡例(垂直分布图)

记号	类别
■	岩隆部
■	岩隆部込部
■	岩隆部外缘部
■	掘込部
■	依壁
■	不明部

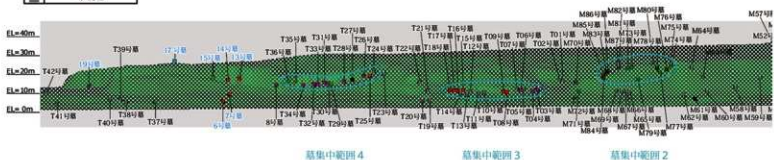
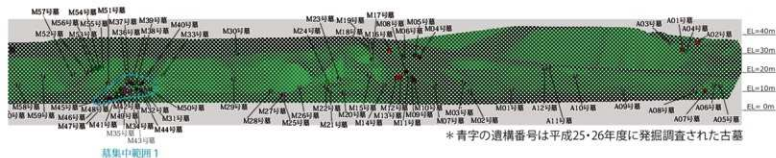
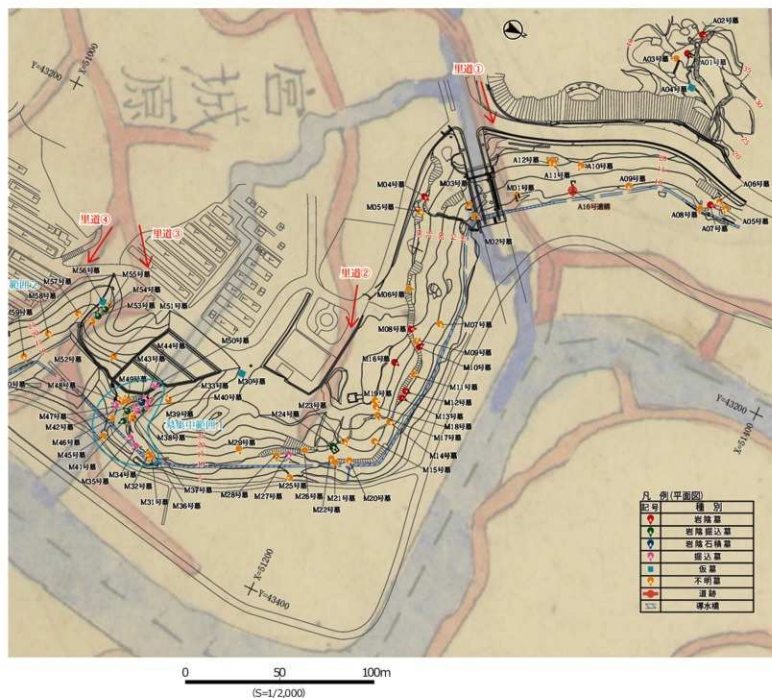


図4.31. 徳首川右岸 垂直遺構分布図





凡例(垂直分布图)

符号	说明
红色	岩层基
绿色	岩层埋达基
黑色	岩层石基基
紫色	埋达基
蓝色	夜基
灰色	不明基

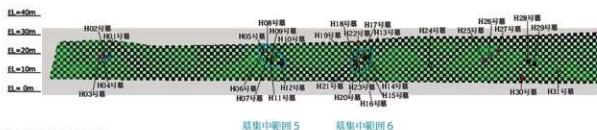


图4.32. 德首川左岸 垂直遗构分布图



写真4.47. その他の遺構

113. A13号遺構 近景 114. H48号遺構 近景
115. H49号遺構 遠景 116. H51号遺構 遠景
117. H52号遺構 遠景 118. H54号遺構 遠景
119. H55号遺構 遠景 120. H56号遺構 遠景

第7節 遺物

平成29年度から平成31（令和元）年度におこなった埋蔵文化財予備調査で確認された遺物の取扱いについては、現位置の記録（座標・写真）に留めて、現地保存を原則とした。なお、丘陵の斜面地や改変地形など、現位置から流出するおそれがあった遺物については保存目的に採取した。従って、今回の調査を面積で比較すると採取保存した遺物は少ないといえる。

採取保存した遺物は総計9点。その内、陶製専用蔵骨器が1点・蔵骨器蓋が1点、沖縄産無釉陶器の壺

や水甕などが6点、沖縄産施釉陶器の壺が1点、香炉が1点、本土産磁器の湯呑みが1点、人骨片が6点、人歯が1点である。遺物のなかで最も古いのは、18～19世紀頃の専用蔵骨器（マンガン釉甕形）で対照的に新しい遺物は現代産の香炉や本土産の湯呑みがある。

遺物整理では、採取したすべての遺物を対象に、洗浄・ナンバリング・接合・復元・実測・撮影の手順でおこなった。本報告では、比較的程度が良い遺物6点を選別し実測及び図化作業をおこなった。遺物の詳細については観察表にまとめる。

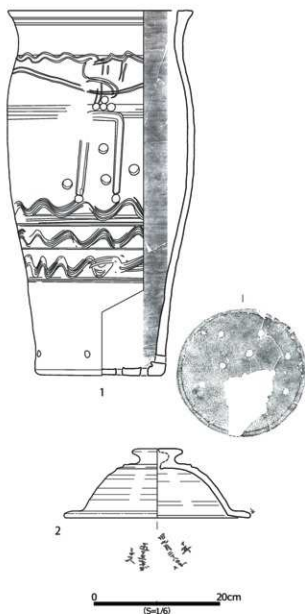
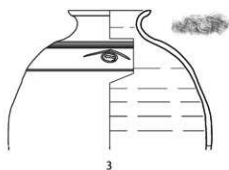
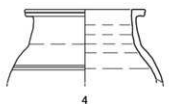


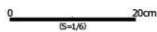
図4.33. 出土遺物（1）



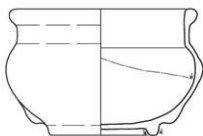
3



4



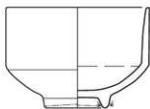
(S=1/6)



5



(S=1/3)



6



(S=1/2)



図4.34. 出土遺物 (2)

表4.51. 遺物観察表

図版 番号	止上地点	遺物種類	物種 別名	分類	法量 (cm)	観察所見	備考
図4.30 1	X=51384.496 Y=43400.301 標高=12.500	片製陶用 炭倉倉	身 11～底	外反変形 (マンガン胎)	11径 29.2 器高 57.9 底径 20.6	近1字状肥厚11縁は数mmに外反し、肩の湾りは急曲。踵下に2条半の幅の波線、胴部(胴1)付付近に2条半の波線による波状文と縦位に2条半位の波線、胴部一位に4条半位の波位波線をめぐらせ、X111付によるアーチ形差1を重なる配列。加戸内に平孔2、加戸の左下に円孔2、底部下文波線は一位から4条・1条・3条位の波位波線(11縁)を波状文と交互に配置。 外志瓦は縁付近は直取りされ、志瓦及び縁近くの裏側面に穿孔あり(底面残存厚で12、4面に7区)穿孔形状は直孔・斜孔とともに円孔。器外周にマンガンを施胎。11隅状平孔あり、外表面は磨光。竹片縞(SYRS/8)の裏地に白粒・黒色粒が混入。	遺物No.1と同一個体の可認。
図4.31 2	X=51383.496 Y=43400.301 標高=12.500	片製陶用 炭倉倉	身 11～底	—	11径 11 体部高 8.6 11径 29.8	鉢形で、唇の形状は扁平形で平孔(底)が空洞。唇台で2段。体部から鉢の折れはやや強く、鉢は斜位に付く。鉢内側には施胎な「き」あり。体部はへら形、器はナデ瓦製。外面にマンガン施胎。4赤帯～赤褐色の裏地に白色粒・黒色粒が混入。器内面に銘書あり。	(銘書) □口五ヶ年/ 1F七ノ十八日 1ノ久ノ十三日 デノシス1 遺物No.2と同一個体の可認。
図4.31 3	X=51280.571 Y=43124.518 標高=9.840	沖繩産 無胎土器	口 口～肩	—	11径 12.9 体部高 1.1 底径 1.1	外縁11縁に肥厚が重なり、ナデ瓦から滑石に移行する様相(口部で最大径)。口縁41は施胎な肩付に6条の波線。1条の波線の間に空白が入れられるにふい(赤帯(SYR4/3)の裏地に白色粒・黒色粒が混入、炭倉倉の転用品か。	
図4.31 4	X=51438.603 Y=43313.359 標高=20.950	沖繩産 無胎土器	口 口～肩	—	11径 (19.2) 体部高 1.1 底径 1.1	近1字状に浮出する11縁で、底の形状は碗形である。11縁部に1条、肩部に2条の波線を施す。内面に施胎が残る。4赤帯色(2SYR5/6)の裏地に白色粒・黒色粒が混入。炭倉倉の転用品か。	
図4.31 5	X=51215.149 Y=43213.175 標高=18.110	沖繩産陶器	香炉 11～底	—	口径 15 器高 10.1 底径 8.5	金漆で口縁部に黒線、胴部には蓮華が描かれる。胴部上面と口部底にうすい波状突起。外面は金付け以外は無彩色で施胎。内面は赤褐色で付くから下部が露出。見込みには口の円形。底面(2SYR5/2)の裏地に白色粒が混入。	
図4.31 6	X=51217.481 Y=43213.961 標高=17.720	本土産陶器	湯呑 11～底 (光沢)	—	口径 7.5 器高 5.3 底径 3.5	近縁代の湯呑。器面に縦縞(ストライプ)模様が11～底に施す。口縁部に付く波線がみられる。器付け以外は全直施胎。	



写真4.48. 遺物



121. 蔵骨器確認状況
122. 遺物取り上げ状況